

■発行
 国立大学法人群馬大学
 ダイバーシティ推進センター

〒371-8510
 群馬県前橋市荒牧町4-2
 TEL: 027-220-7146
 FAX: 027-220-7143
 mail:kyodo-sankaku@ml.gunma-u.ac.jp
 HP:http://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/

2023.11

vol.33



大学幹部の皆様との ランチミーティング 開催

令和5年9月4日(月)、4年ぶりに対面形式で、大学幹部の皆様とのランチミーティングを開催しました。荒牧キャンパス中会議室にて、研究や男女共同参画、ダイバーシティに関する情報交換を行い、学長を含む大学幹部の皆様9名と教職員10名が参加しました。久しぶりの対面での開催で、テーブルごとに談笑し、あっという間の1時間でした。終了後アンケートでは、ランチミーティングは「有益」との回答でした。開催時期や場所について、全学の教職員が参加しやすいよう検討し、今後も定期的に開催させていただきます。参加者、関係者の皆様には、大変お世話になりました。



理工学部オープンキャンパス開催

令和5年9月9日(土)と10日(日)の両日開催された理工学部オープンキャンパスにおいて、大学生協2階にある購買協のオープンスペースを会場に「先輩リケジョとゆるゆるトーク〜ケーキを添えて〜」と題した『現役の本学の女子学生(学部生・大学院生)と女子高校生とが自由なトークを楽しむイベント』が開催されました。コロナ禍が落ち着いて初めて対面形式でのオープンキャンパスが戻ったこともあり、以前に荒牧キャンパスで成功した「女子カフェ」を模した、女子高校生向けの新たな行事を企画することになりました。



2日間を通じた同行事の参加者は、オープンキャンパスに訪れた女子高校生ならびに同伴する保護者等の合計数で187人にのぼる大盛況でした。その内訳は全体の3分の2程度が高校生で残りのほとんどが同伴するご家族だったことから、オープンキャンパスを訪れる女子高校生の半数程度は親子同伴で会場されたことが分かります。小さなテーブルに分かれて高校生とのトーク対応にあたってくれた本学の「学生コンシェルジュ」たちも献身的にふるまっていたいただき、女子高校生たちと親身で楽しいトークを2日間繰り広げてくれました。

参加者に回答してもらった事後のアンケートによると、同行事への参加の一番の動機は、やはり現役の大学生と会話をして大学生活の雰囲気を知りたかったため、専門分野などの具体的な進路選択を相談するというよりは、女子学生ならではの相談事を同じ女子同士で気軽に聞いてみたかったという状況だったようです。こうした打ち解けた会話を求める女子高生のニーズに対しては、今回の企画で特色とした「参加者には好きなドリンクを、また、高校生には無料で好きなケーキを食べてもらえる」という、スイーツをいただきながらの会話を楽しむスタイルがとてもマッチしたのではないかと思います。今回の経験を活かして、次年度もさらに女子高校生たちが理工学部慣れ親しんでいただけるような企画を検討してまいりたいと思います。



NHK『ほっとぐんま630』に

林 副センター長が出演しました

令和5年8月2日(水)NHK「ほっとぐんま630」の番組の中で『群馬県における男性の育児休業をめぐる現状と課題』をテーマとした特集が生まれ、私は男女共同参画やダイバーシティを推進している教員として、また、妊娠・出産、育児、妊活等の分野の専門職の立場で出演させていただきました。

放映された内容を少しご紹介いたします。厚生労働省の調査によると、令和4年度の男性の育児休業取得率は、過去最高の17.13%でした。しかし、群馬県警は9%だったことから、男性の育児休業取得率をあげるために管理職の意識改革を促す研修会を開催している様子が放映されました。また、ちょうどその頃、育児休業中だった男性警察官K氏が取材に応じ、第2子の妊娠を機に上司に育児休業の取得を申し出たところ、よい機会だと強く背中を押してもらえたこと、仕事のカバー体制ができていたことから、1か月の育児休業を取得したそうです。また、K氏は24時間続く育児を経験したことで、「育児は大変だが、癒やしでもある。大変さのなかに、幸せがあると感じている。」と語っていたのが印象的でした。放映された内容は、NHK前橋放送局「ぐんまWEBリポート」のホームページに掲載されていますので、ご覧いただければと思います。

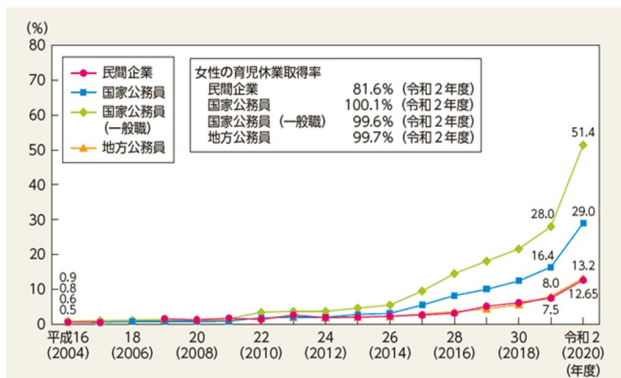
本学の男性教職員の育児休業取得率ですが、令和4年度は31%で全国平均より高く、年々増加していますが、取得日数が短いことが課題となっています。政府は、「子ども未来戦略方針」において、国・地方の公務員に係る男性の育児休業取得率について、令和7年までに1週間以上の取得を85%に引き上げることを目標としています。昨年10月に育児・介護休業法が改正され、通称「産後パパ育休」(出生児育児休業)が新設されました。これは1歳までの育児休業とは別に、子どもが誕生して8週間以内に4週間を限度として、2回に分けて取得できるものです。労働者と事業主の個別合意により、休業中に就業することもできます。男性の育児休業に関する調査結果によると、取得しなかったのは、「職場で取得しづらい雰囲気がある」という理由が最も多かったため、法改正では、妊娠・出産の申出をした労働者には、事業主が個別に育児休業取得の意向確認をすることが義務付けられました。



出産後の女性は、昼夜問わない育児で睡眠不足が続き、疲労困憊しています。このような時期にパートナーが産後パパ育休を取得して育児や家事をシェアすることは、ママのメンタルヘルスのためにも重要です。育児は手伝うものではなく、シェアするものです。生まれたばかりの子どもを二人で一緒に育てる経験は、かけがえのない思い出となることと思います。

産後の女性は、昼夜問わない育児で睡眠不足が続き、疲労困憊しています。このような時期にパートナーが産後パパ育休を取得して育児や家事をシェアすることは、ママのメンタルヘルスのためにも重要です。育児は手伝うものではなく、シェアするものです。生まれたばかりの子どもを二人で一緒に育てる経験は、かけがえのない思い出となることと思います。

育児休業を取得したいと考えている男性の皆様は、ご自身はもちろん、次に続く方のためにも、ぜひ声を上げて取得していただきたい思います。管理職の皆様は、家事や育児は女性の役割という固定的役割分担意識を払しょくし、ダイバーシティ職場環境の推進にご協力をお願い申し上げます。



【参考】男性の育児休業取得率の推移

(平成16年～令和2年)

出典:男女共同参画白書(令和4年度版)



医学系研究科ダイバーシティ 推進委員会セミナー -育休のススメ- 開催

9月28日(木)開催の令和5年度医学系研究科ダイバーシティ推進セミナーでは、「より良いワーク・ライフ・バランスのために知っておきたい大切な話 -育休のススメ-」と題して3名の先生からご講演とパネルディスカッションが行われました。

福島一憲先生(救命救急センター助教)は救急科後期研修2年目の時に、3か月間の育児休業を取得され、翌年には第2子に対し再び3か月のパパ育休を取得。家事・育児に休みはなく、思った以上に重労働だった、男性の体力はとても役立った、救命救急センターはシフト制でチーム医療体制を敷いているため育休には適した科であった、という点に気付いたとのことでした。

続く産婦人科所属の鈴木美咲先生は、初期研修2年目に出産。パートナーは外科後期研修開始予定でしたが、1か月間の育休を取得。育児休暇中は思う存分子供と向き合うことが出来、家族3人での貴重な時間を共有できたことが何よりの成果だったそうです。パートナーの職場では、育休取得に関して概ね好意的な意見が多く、「育休良いね」、「ビックリ」、「オレも取りたい」などの声が聞かれたとのことでした。

続いて、過去1年間に3名と最も男性医師の育休取得人数が多く、先進的な取り組みを行っている泌尿器科の鈴木和浩教授からのお話がありました。最初に育休を取ろうと手を挙げられた先生がいたことがこのような循環を生み出すのに大事だったというお話でした。それまでは医局での男性医師の育休取得者の経験がなかったため、医局が上手く回るのか、他の先生に迷惑をかけないかどうか、そもそも男性が育休を取ることに理解が得られるのかどうか不安であったが、ワークライフ支援プログラムを利用中の女性医師がおり子育て支援をサポートする精神がすでに育っていたこと、教授が後押ししたこともあって、科として前向きにサポート体制の構築を考えることができたとの事でした。フロアから、これから妊娠出産を考える女性医師にとっても、男性医師の育児休業取得は大変意義深いことであり、良い循環が今後生まれることを期待するとの意見がでました。

最後に、フロアにいる実際に育休を取得された若手医師も含めて、具体的な良かった点、困ったことなどの経験の活発な意見交換、パネルディスカッションが行われました。群馬大学附属病院が開院以来、初めてこのような話題が取り上げられ議論されたことは大変意義深いことであり、今後、男性医師の育児休暇取得率の増加を大いに後押しするセミナーとなったと思われます。





令和5年度 医学生・研修医等を サポートするための会 開催

令和5年10月2日(月)、群馬県医師会主催で、「令和5年度 医学生・研修医等をサポートするための会」が開催されました。本会は、医学科4年生の臨床実習前講義として、男女共同参画やワークライフバランスについて考える機会となっています。医師会の活動について、医師会理事の今泉友一先生にご紹介いただいた後、「教えて、先輩！～ワーク・ライフ・バランスを考えよう～」と題して、検査部講師 常川勝彦先生、総合医療学准教授 佐藤浩子先生、医療の質・安全学教授 田中和美先生より、それぞれの学生時代や卒後のキャリア形成についてご講演いただきました。

常川先生には、“サポート”がキーワードとなってきた臨床、研究、教育の側面からのご自身のキャリア形成について、佐藤先生には、「悩んだ、迷った、自信がなかった」進路選択、また、「こころ」と「くらし」を診る総合診療の魅力や大きな転機となった漢方との出会いについて、田中先生には仕事を継続していく上で大事になさっている、「相手の立場に立つこと」、「利己的にならないこと」、また、子育てやスポーツ活動を通じた地域や人とのつながりが仕事にも活かされていることなどについて、お話しいただきました。多忙な先生方から、後輩に向けて、“迷ったら損得ではなく善悪で動く”、“自分のベストを尽くす”、“on、offの切り替えを”と具体的なアドバイスをいただき、閉会后、多くの学生から先生方のキャリアに共感する感想が寄せられました。



ダイバーシティ推進センター

令和5年度
後期スケジュール

- ・シンポジウム
- ・性の多様性講座
- ・研究力アップ講座
- ・令和6年度共同研究促進事業募集
- ・令和6年度研究活動支援制度募集(後期分)



※現時点の予定となりますので変更や中止の場合もございます。予めご了承ください。